

“The Other Story”展（1989 年、イギリス）にみるモダニズムと他者

石松紀子（九州大学大学院）

1989 年、ロンドンのヘイワード・ギャラリーを皮切りに、イギリス国内全 3 カ所を巡回する展覧会、“The Other Story”展が開催された。副題に「戦後イギリスにおけるアフロ・アジア系の美術作家たち」とあるように、第二次世界大戦後、アジア、アフリカ、カリブ諸国からイギリスへ移民した第一世代作家と、移民の親をもちイギリスで生まれ育った第二世代作家たちの、50～80 年代に制作された作品を回顧する展覧会である。この展覧会の企画者は、パキスタン出身の作家であり、また美術批評家でもあるラシード・アライーンである。彼は、「ほとんど語られることのなかった作家たちのイギリス美術史への貢献を示したかった」と、展覧会開催の理由を述べている。その作家たちのイギリス美術への貢献を考える時、その作品とモダニズムの関係を無視することはできないように思われる。本発表では、“The Other Story”展におけるモダニズムを、帝国主義との関係や、西洋における「他者」へのまなざし、といった観点を含めて考察したい。

まず、展覧会の背景をなす、帝国主義におけるモダニズムと他者の関係について言及する。植民地支配をとおして、植民者である西洋と、被植民者である非西洋の従属関係ができ、「優れた」西洋と「劣った」非西洋という図式が確立された。それは、アフロ・アジア系の作家たちが、これまでイギリス美術史において周縁化されてきたことと無関係ではない。また、帝国は、「文明化」という名目のもと、植民地諸国を次第に「近代化」していき、美術界においても、「近代化」の一つとしてモダニズムが紹介されていった。特に、同展覧会で紹介される第一世代の作家たちは、このモダニズムの影響を大きく受けている。

非西洋諸国の美術界においても、「近代化」の波が押しよせたにもかかわらず、西洋における非西洋のイメージは、変わらない普遍の伝統の中でみられていた。“The Other Story”展を考える上で重要な同時代に開催された 2 つ展覧会からも、そのことがうかがえる。84 年にニューヨークの MOMA で開催された「20 世紀美術におけるプリミティヴィズム」展と、89 年にパリのポンピドゥー・センターで開催された「大地の魔術師」展において、西洋がどのように他者の美術を見ていたかを検討する。それは同時に、西洋が自分たち自身の美術をどのように考えていたのかを示唆し、それにより The Story の一端を理解する。

最後に、展覧会に出品された作品を取り上げることで、“The Other Story”とはどのようなものを具体的に考察する。展覧会は 4 つのセクションからなるため、各パートから 1 名ずつの作家と、ラシード・アライーン本人を含め、合計 5 名の作家とその作品について検討する。帝国主義によって世界的に広がったモダニズムが、いかに多様な視覚的言語を語り、反モダンや親モダンといった、相反する複雑な特徴を伴っているかを、作品をつうじて探求する。これらを通じて、イギリス国内では批判が多かった“The Other Story”展を改めて評価したい。